1995-33
『中央公論』第百十年第13号第1329号　95年10月号 pp148-161　中央公論社

「転型期」中国の思想と文化

孫津（ソン ジン）

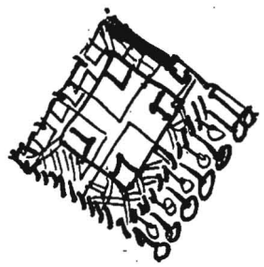
インタビュー・訳　橋爪大三郎

改革開放、天安門事件、市場経済導入と急激な経済成長……この一五年間、中国の思想・文化は社会の大きなうねりにどう影響し、影響されたのか。中国を代表する気鋭の思想家に聞く

天安門事件から丸六年、今年の六月四日も、何ごともなかったように過ぎていった。あれほど世界の共感を集めた民主化運動の学生たちも、あるいは国内で息をひそめ、あるいは亡命先で歳を重ねているうちに、歴史の表舞台から遠のいていく。そのいっぽうで中国経済は、ポスト鄧小平への秒読みを重ねつつ、成長の道をまっしぐらに突き進んでいる。

一九八九年春にひとつのピークを迎えたエネルギーを、日本のマスコミは「民主化」のひと言で片づけてきたが、その内実は何だったのか？　中国の若い世代の人びとの、どのような思想的・文化的な営為がその底流をかたちづくっていたのか？　そのことが、十分に知られていない気がする。そのためわれわれは、ちょうど丸山真男も吉本隆明も清水幾太郎も西部邁も知らないで六〇年安保のニュース映画を観るアメリカ人のような、外野席の感覚から抜け出られないのではないか。

そういう思いを、中国の著名なロック・アーティスト崔健（ツイ ジェン）氏が来日した折に彼に伝えたところ、これは面白いと思うよと、『転型的中国』（転型期の中国）という本を届けてくれ、その著者・孫津氏を紹介してくれた。孫津氏は、若いながらも著名な思想家で、改革開放以後の中国の文化シーンとともに歩んできた人物である。氏がたまたま、今年の三月に科学技術庁が開催した「科学技術フォーラム」に出席のため初来日した機会をとらえて、インタヴューの時間をもつことができた。



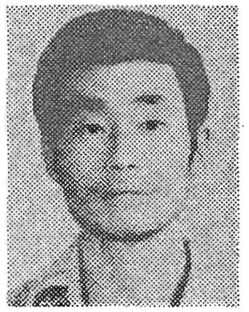
中国アカデミズム界の不自然な断層

――孫博士、日本へようこそいらっしゃいました。今日は、この一五年間の、中国の思想界の状況についてお話しいただきたいのですが、その前にまず、あなたご自身の経歴についてお話し下さいますか？

孫　あまり大した経歴でもないのですが……。私は一九六八年、江蘇省北部の農村の生産大隊に「挿隊（チャートイ）」（下放）になり、そこで一〇年間労働しました。

改革開放が始まって、一九八〇年に科学研究、特に社会科学関係の組織の再建が始まりました。社会科学関係の組織は「文化大革命」中に大部分が解体されるか、麻痺状態に陥り、多くの学者・研究者が農村に送られ労働させられたり、関係ない仕事に回されたりしていたのです。そこで国家は、研究者を公開で募集することに決め、各級の社会科学院を再建・拡充しました。私はその年に、統一試験にパスして、採用になったあと、江蘇省社会科学院の文学研究所に配属されました。そこでは主に、西洋美術と文芸理論を研究しました。

孫津氏



魯迅文学院副研究員。1952年生まれ。哲学者、批評家。10年あまりにわたる下放ののち、江蘇省社会科学院で美学を研究、美術批評で頭角を現わし、北京師範大学大学院で博士号を取得。80年代を通じて中国新思潮をリードした著名な若手思想家である。最近は、地方都市再開発を手がけるシンクタンクにも籍をおく。著書に『転型的中国』など。

そのあと一九八六年には、北京師範大学の大学院博士課程に合格し、黄薬眠教授と童慶炳教授の指導のもと博士課程で学び、一九八八年七月に文学博士の学位を取得しました。そのあとすぐ魯迅文学院に配属され、副研究員（助教授に相当）を務めるかたわら、教壇に立っています。私は現代化の国際比較をテーマに選び、ことに政治文化の側面に力点を置いて講義しています。受講している学生は、中国人の作家や文学青年といった人びとです。

――その、「挿隊」という言葉を、ちょっと説明してもらえますか？

孫　これは面白い言葉で、「文化大革命」中にうまれた歴史的カテゴリーなのです。字で見れば、「挿」とは押し込む、参加するという意味。「隊」は当時の中国農村の生産の基本単位です。ですから「挿隊」とは、都市の人びとが農村に行って、労働・生活する（彼らの大部分は都市戸籍を取り消されてしまう）ことをいうのです。それに、「挿」という字は、正常な秩序を打破するという意味もある。事実、都市も農村も、こうした「挿隊」を仕方なしに、不承不承受け入れるわけです。当時、政府は公式には「挿隊」でなしに、「上山下郷」（辺鄙な山村や農村に入る）と言っていました。

――そこで中国の思想・文化の情況を、二つの面から紹介していただきたいと思うんです。ひとつは、改革開放このかた、どういう変化が起こったか。特に、どういう問題が主に

議論されてきたのかについて。もうひとつは、それを、孫津さん自身がどう評価するかについて。この二点について、文革世代やもっと若い世代の人びとの置かれている状況を踏まえて、説明して下さい。

孫　私個人の評価は重要でないけれども、完全に客観的な紹介もありえないので、私の主観をまじえた評価ということでお話しします。

まず、これはむずかしいテーマです。いま文革世代やもっと若い世代とおっしゃったけれど、たしかに中国では年齢層が異なると、関心のある問題、提出される見解はかなり違ってくるのです。あまり具体的な問題を論じるのもどうかと思うので、いくつか変化の特徴にしぼって、説明してみましょう。

こういう問題を語ると、おのずからひとつのキーワードに帰着するように思う。それが「転型」（転換）なのですが、中国社会が全体的に「転型」しつつあるという背景がまずあり、その「転型」が進んでいくのにしたがって、問題の焦点や力点も変わってくるというふうになっているのです。

「転型」とは、九〇年代になってから中国で使われるようになった言葉で、一九七八年の改革開放このかたの変化――中国でこれまでに起こったこと、いままさに起こりつつあること、これから起こるであろうこと――の全体を指します。

この転型には、二つの意味があると思います。第一に、中国はいまちょうど、新しい現代化のモデルを模索しつつ実践しているところですが、そのモデルが変わってきているという意味。第二に、社会実態そのものにも、本質的な変化が起きているという意味。私は「転型」を conversion と訳すのですが、それはこの言葉が価値観の変化にも及ぶという意味があり、単なる変化 change にとどまらないからです。

つぎに、文革世代やもっと若い世代についてですが、「老三届（ラオサンジェ）」（文革世代）のことから話すのがいいでしょう。

「老三届」とは、一九六六、六七、六八年の三年間に、中学を卒業した人びとを指します。中学と言っても、初中（日本の中学にあたる）と高中（日本の高校にあたる）があるので、実際には六届（六年間）、すなわちほぼひと世代にあたります。彼らの大部分は農村に「挿隊」されました。国営農場へ下放された者も、軍隊の生産建設兵団へやられた者もいます。

八〇年代の初めになると、この「老三届」の人びとは、政府の指示や自分のツテによって、農村から都市に戻ってきました。けれども、彼らは都市でもたちまち、新しい困難に直面します。就職できなくて不満ですし、専門技術も不足している。学業を継続する機会もなしに、人生最良の時期を棒にふってしまった。結婚して子供をもうける年代になっても貯蓄も定収もない、などなど。実際、「老三届」の年齢層の人びとは、みんなもうかなりの年で、決して若くありません。「老三届」世代の人びとで大学に入り研究機関で職についた人びとはごくわずかなため、中国のアカデミズム世界には、年齢のうえから言って不自然な断層があるのです。

――その問題は重要ですね。というのは、これは、中国の文革世代からもっと若い知識層の人びとを理解するための基本的な歴史背景だからです。孫津さんは、こうした背景を典型的に背負っているとも言える。農村に下放されながら、孫津さんは油絵も描いていたし、学術的な研究活動は美学から始まって、文芸理論、神学からだんだん政治社会学の方面に発展してきた。こうした変化は、中国の思想・文化界の価値関心の変化の特徴でもあると思うのです。

孫　そうかもしれません。「老三届」（文革世代）でありつつも、私のアカデミックな立場の変化は、やはりある特定の知識構造の影響をうけるわけです。総じて言うなら、中国の思想・文化界には改革開放このかた、ずっとひとつの特徴がありました。それは、中国の現実に関わり参画する場合の、使命感と緊迫感です。

思想・文化の面では一九八五年ごろから「文化熱（クヴェンホワルー）」（文化ブーム）が起こりました。誰もがみな、文化のことを語りました。

こうした文化ブームが形成された原因は、二つあると思います。第一に、人びとが関心をもっていたのは実のところ政治問題だったのです。ただ中国ではこの方面の討論をするのにイデオロギーの制約があるうえ、せっかく意見や提案を討論してもそれを政策に反映させ政府に実施させるのはとても困難であった。第二に、五四運動時代からの啓蒙の伝統で、思想は新文化を擁護し、旧文化を批判するのが常なのですが、これは新しい文化を創造することのはずです。でもこの「新」文化とはおおむね西欧のことですから、創造すべき新文化の中身は実ははっきりしないのです。

――ああ、それは面白いし、よくわかります。「文化ブーム」当時、どういうテーマが問題になっていたか、ちょっと紹介していただけませんか？

孫　すべてのテーマは、一点に帰着します。すなわち、思想の解放。これは改革開放以降、一貫して唱えられてきた政府の基本政策でもあります。

それでは、どんな思想をどの程度まで「解放」するかということですが、この問題は具体的で複雑なうえ、たとえば資本主義とは公然と口に出せないといった具合に、政府にははっきりした制約がありました。

「文化ブーム」は、時間的順序から言うと、文学→芸術→哲学の順に、三つの領域が比重を変化させていくこととしてあらわれました。これはなぜかと言うと、中国には多くの読者大衆がいますから、まず文学作品がもっとも早く、もっとも容易に、もっともくっきり、政治問題をはじめ、人びとの関心のある問題を反映することができるからです。またここで「哲学」とは、広義に、さまざまな分野の理論を指しており、その模索、蓄積、普及、継承の過程を含みます。また芸術ですが、これは中国の思想・文化の変化にとって特別な重要性を持っています。視覚的なイメージを用いて、西欧思想をきわめて効果的に体現し大量に導入することができるから

です。

八〇年代「文化ブーム」の中身

――改革開放の時期に「摸着石頭過河」（石を手探りして河を渡る）という言葉がありましたね。まだでき上がっていないモデルを用いても、少しずつ経験を積み重ねて、もっとも良い方法を見つけだせればそれでよい、というような意味です。そうすると、八〇年代の「文化ブーム」の中身とは要するに、改革開放という特殊なやり方にともなって現われた、価値観の探求だと考えてよいのでしょうか？

孫　基本的に言うなら、まさにその通りです。以下、文学、芸術、哲学の順序でお話ししましょう。

まず文学について言えば、中国思想・文化界になにかの理論潮流を形成することもないまま、わりに早くから、改革開放の時代の中国人に普遍的な心情、すなわち、過去のイデオロギーに対する批判の気持を、反映していました。こうした批判は観念の面で、改革開放がうみ出す社会の「転型」の、前提となるものです。

改革開放は、一九七八年十二月中国共産党第十一期三中全会から事実上始まっていたのですが、それが合理的・合法的に実施されるようになったのは、一九八一年六月の中国共産党第十一期六中全会が「建国以来の党の若干の歴史的問題についての決議」を出してからでした。この決議（中国共産党の過去に批判的評価を下している）のおかげで、人びとの行為は、政策上の法的根拠を持つようになりました。文学は、そうした法的根拠を与えることこそしませんが、人びとの「文化大革命」に対する恨みやうっぷんを、いち早く表出することができます。

一九七七年の末に、劉心武の「班主任」や蘆新華の「傷痕」に代表される、一連の短編小説が発表されました。内容はいずれも、「文化大革命」が正常な人間性をねじ曲げ、幸せだった人生を打ち砕いてしまったことへの批判です。こうした作品は、すぐさま「傷痕文学」と呼ばれるようになります。もう少しあとに発表された、従維熙の「大墻下的紅玉藍」、馮驥才の「啊！」、葉尉林の「在没有航標的河流上」、張賢亮の「土牢情話」、王蒙の「布礼」、王安憶の「尾声」といった中編小説や、莫應豊の「将軍吟」、竹林の「生活的路」、李国文の「冬天里的春天」などといった長編小説も含めていいでしょう。これらは、芸術的達成という点で言うなら、中国の改革開放期の文学の優れた代表作だと言いにくいかもしれませんが、当時の数年に発表された数量は大したもので、文学が思想の解放や文化の発展に大きな作用を及ぼしたとは言えると思います。

中国は毎年、文学評奨（文学作品の成績を評価し表彰する）があるのですが、その推薦統計でみると、短編小説の場合、一九七八年は一二〇〇篇あまり、一九七九年には二〇〇〇篇近く、一九八二年には六〇〇〇篇あまりと急増している。中編小説の場合、一九七九年は八〇篇あまりですが、一九八〇年

には二〇〇篇近く、一九八一年には四〇〇篇、一九八二年には六〇〇篇、と発表が増えている。長編小説の場合も、一九七七年には約五〇篇だったものが、一九七八年には六〇篇、一九七九年には八〇篇近くと増え、一九八〇年以後はずっと一〇〇篇以上の発表となっています。これらの作品はすぐに、「文化大革命」を批判するだけでなく、時間的にも一九四九年以来の新中国の歴史や、一九二〇年代以降の革命の歴史を含むように広がっていきました。同時に、改革開放期の新しい体制、新しい観念と、旧い体制、旧い観念との矛盾衝突を反映した作品、たとえば蔣子龍の「喬廠長上任記」（一九七九）、「開拓者」（一九八〇）、水運憲の「禍起蕭墻」（一九八一）などの作品が現われます。こうして「傷痕文学」は変化して、「反思文学」（反思は、もういちど考え直してみる、という意味）と呼ばれるようになります。

「傷痕文学」はおおむね、思想・文化上の批判意識を表現しただけでしたが、「反思文学」にしても、問題を理論的に表現し問題を明確に提出するにはほど遠いものでした。文学と文学批評が、ある民族の批判意識を全面的に開け放ったという実例が、外国にはありました。たとえば、レッシングの時代のドイツとか、ベリンスキーの時代のロシアとかがそうです。けれども、改革開放以来の中国では、文学批評の水準がそこまで高くなく、いまに到っています。一九八五年以前の文学で、ほんとうに「文化ブーム」に対して理論的に影響した点と言えば、ヒューマニズムをめぐる人びとの討論を促したということかもしれない。それ以後の文学は、形式の面での実験を重視するようになり、また、大量の文学理論が翻訳されたこととともあいまって、西欧の文学技巧を取り入れた形式の実験が行なわれるようになり、のちにはラテン・アメリカや東欧の文学に対する興味も生まれました。上にあげた作家たちは、王安憶、竹林ら「老三届」世代に属する人びとを除き、大多数がそれ以前の作家たちです。「老三届」世代が成熟した作家群として登場するのは、一九八五年以降のことです。

つぎに、美術についてお話ししましょう。

美術がわれわれの話題にとって重要なのは、それが、きわめて生き生きとした形式、まったく新しい美学概念を思想・文化界にもたらしたからです。

五〇年代このかた、中国の美術は、芸術は現実を反映しなければならないという点を強調し、当局のイデオロギーに合致する重要な題材を描くようにという主張ばかりまかり通っていました。形式の面では、ソ連に学んだ写実的方法を用いていました。一九八四年から青年画家たちは、これらを否定する挑戦を始め、一九八五年にはそれが大きな流れとなって、批評界のいう「八五年美術運動」となります。これは、美術創作と批評を柱とする、全国規模の思想・文化の解放運動でした。芸術は理性の探究を表現すること、芸術そのものが一種のライフスタイルというか形態であること、生活と無縁な人為的な技巧や観念ではないことを主張したのです。

八五年美術運動のあと、作品の数量のうえからも、スタイ

ルの変化のうえからも、中国美術の主導的地位を占めたのは、現代芸術（モダンアート）でした。モダンアートは、思想・文化界に対して、二つの点で大きな影響を与えました。第一は、その強烈な衝撃力。中国のモダンアートが参照し参考にしたのは、みな西欧のものでしたが、文化的な開放政策の進展にしたがって、大量の西欧思潮ならびに作品が紹介されるようになりました。それらは主として、十九世紀末から八五年美術運動にいたるまでの時期の西欧芸術です。印象派、後期印象派、野獣派、キュビズム、抽象派、ダダイズム、シュールリアリズム、表現主義などといったさまざまな芸術流派、観念、作品が、「現代派」（モダン派）芸術に受け継がれました。中国美術はたかだか数年のうちに、西欧がルネサンス以来六〇〇年のあいだに生み出した各種の美術方法をあわただしくひと通り試してみることになったのです。百花繚乱とはこのことで、青年画家たちは写実的な基礎訓練を続けることに興味を失いました。「モダン派」はこうした種々雑多なスタイルを抱えていますが、実際には各種の芸術的、美学的、政治的要求をひとくくりにするのに用いられました。

第二は、哲学観の表現。中国のモダンアート作家は、中国各地で自発的に各種の芸術グループを組織し、頻繁に各種の展覧会を開きました。だいたいどの展覧会にも、なにがしかの宣言があり、学術討論会もあって、画家たちは哲学者の参加をあおぎ、芸術活動をしながら大いに哲学を論じました。モダンアートの作家たちは、創作の自由を大いに主張し、自我表現を要求し、芸術が当局の政治に奉仕することに反対しました。そのころ、前衛芸術を専門に紹介し討論する雑誌がいくつか創刊されました。それらは、『中国美術報』『美術思潮』などです。多くの批評家、理論家たちはまた同時に、モダンアートの組織者、活動家、雑誌編集者でもありました。たとえば、劉驍純、高名潞、栗憲庭、皮道堅などといった人びとです。

もちろん、こうした運動に身を投ずる人びとの社会階層も、大事な問題です。中国のモダンアートは、芸術の範疇をはるかに超えて、全社会的な文化批判の意味あいを帯びるようになり、活発な展覧会や頻繁な討論会はある種の文化的方向性を表現するまでになりました。こうした方向性は、たとえば人間の生存の意味、自由の限度、文明の価値、社会形態の合理性、などといった哲学の諸問題に目配りしたもので、また総じて言えば、こうした問題をめぐる当局の一貫した解釈に批判的な態度をとるものでした。そこで、政府によって、「ブルジョワ階級の自由化」「精神汚染」と指弾されることになったのです。

一九八九年二月に「中国現代芸術展」が北京の中国美術館で開催されました。この展覧会には、全国各地のモダンアートの代表作品が集められ、八五年美術運動以来の中国モダンアートの試行錯誤とその成果が集中的に展示されました。政府はこの展覧会に批判的な態度をとり、展覧会の期間中にもいろいろ干渉しました。そのころ、各地の大学などではすでに

一連の潮流が現われており、現代芸術展にも「政治波普」（政治ポップ）と称されるいくつかの作品が展示されて注目を集めました。これは、「ポップアート」のスタイルを借りて政治的主張を表現するものです。四月十五日に胡耀邦が死去すると、モダンアートの芸術的な傾向がますます政治化し、のちに「六四事件」と呼ばれる街頭抗議行動に合流してゆきました。

「六四事件」と思想・文化の変化の関係

——哲学はどうだったのでしょうか？

孫　哲学は、美術のように派手ではないのですが、各種の理論問題がやはり「文化ブーム」のなかでますます多くの人びとの関心を集めるようになっていました。

ここで興味ぶかいひとつの現象は、多くの人びと、特に若い人びとが美学に興味を示したことです。なるほど「六四事件」以後、人びとが空理空論は役に立たないと思うようになったのは事実です。それでも現在にいたるまで、大学院生を募集すると、志願者が一番多くて競争の激しいのはやはり美学と文芸学なのです。

改革開放のはじめの数年間、哲学が集中討論したテーマは、人道主義、異化などで、とりわけマルクスの『経済学哲学草稿』（一八四四年）をめぐって討論が繰り広げられました。その当時の哲学は、思想体系、社会形態、経済体制、文化観念、価値観など、あらゆる角度から中国の現代化について探究を進めていました。『経哲草稿』に対する関心も、マルクスをもう一回新たに解釈して、新しい、改革開放に適合的な基本原則を探りあてようとするところにありました。こうした情況は、「ヨーロッパ・マルクス主義」、フランクフルト学派、ユーゴスラビア実践派などの理論や主張の影響を受けたものです。討論の過程でさまざまな意見がでましたが、総じて言うと、こうした討論は当局のイデオロギーと一致せず、たちまち中止に追い込まれました。そうした観点のあるものはやはり、「ブルジョワ階級の自由化」「精神汚染」と呼ばれたのです。

哲学の分野では、西欧の影響がさらに顕著です。私のみるところ、五四運動のときよりももっと大規模かつずっと自覚的に、アジア人として西欧に学ぶ態度をとっています。ここで自覚というのは、開放的な態度のことであり、何もかも西欧に学ぼうと主張することではありません。また、大規模とは、西欧の学術著作が大量に翻訳されたことに現われています。

こうした翻訳の作業は、主に若い人びとが始めたのですが、組織的かつ計画的に進められました。多くの著作が叢書のかたちで翻訳されました。商務印書館は、世界の名著を翻訳することを重要な業務としていましたが、「文化大革命」でこの仕事は中断していました。一九八一年、商務印書館は「漢訳世界学術名著叢書」の翻訳出版を組織的に再開し、一九八六年までに二百冊あまりを刊行しました。そのほかの出、

版社の刊行した学術翻訳書も、「現代西方学術文庫」「二十世紀文庫」「現代政治学叢書」「国外マルクス主義・社会主義研究叢書」「現代訳叢」「海外中国研究叢書」「海外学人叢書」「海外漢字叢書」「宗教与世界叢書」「美術訳文叢書」「西方学術訳叢」「現代外国文芸理論訳叢」「九十年代世界暢銷書」など、多数にのぼります。これらの叢書は、少ないもので十冊、多いもので百冊からなり、現在でも引き続き売られています。これに加えて、叢書のかたちをとらない訳書も、おびただしい数にのぼります。これらの訳書がカヴァーする学問分野は広範にわたり、どの学問分野の重要人物・代表著作ももれなく紹介され訳出されています。

翻訳紹介されている作者・著作はあまりに多いので、それらをいちいち列挙することはできませんが、総じて哲学の分野で比較的注目を集めたのは、実存主義、分析哲学、現象学、新トマス主義、行動主義、構造主義、脱構造主義でした。社会学の分野では、マックス・ヴェーバー、ダニエル・ベル、サミュエル・P・ハンチントン、S・N・アイゼンシュタット、エルンスト・カッシラーなど伝統的な西欧文明に挑戦的な理論家たちや、ミケル・デュフレンヌ、ヘルベルト・マルクーゼ、マックス・ホルクハイマー、ユルゲン・ハバーマスなどの批判理論でした。経済学の分野では、ケインズ以後の理論、たとえば、ゲーリー・ベッカー、デビッド・フリードマン、ジョアン・ロビンソン、ハイエク、サミュエルソン、J・K・ガルブレイス、J・M・ブキャナンなど。

神学の分野では、マルティン・ブーバー、F・マックス・ミューラー、ポール・ティリッヒ、クリストファー・ドーソンなど。法律、教育、外交、軍事、文化などの分野でも大量の翻訳がありますが、ここではのべきれません。

ここで面白い現象は、美学者の著作以外に、美学者でない人の理論も美学とみなされ、むしろそうした人びとの美学思想のほうが、美学の専門家の思想よりもずっと深刻に受けとめられたことです。たとえばジャン＝ポール・サルトル、ルードヴィッヒ・ヴィトゲンシュタイン、マルティン・ハイデガー、ミシェル・フーコーなどです。こうした現象は、中国の「美学熱」（美学ブーム）の強烈な理性主義的特徴を反映していると言えます。

社会に対する批判から出発し、人間の生きる価値、潜在意識が文化を形成する場合に果たす役割といった問題までカヴァーする三人の学者――マックス・ヴェーバー、ジャン＝ポール・サルトル、ジグムント・フロイトの思想が、中国の思想・文化界に持続的かつ普遍的な関心を喚び起こし、その読者もいわゆる学術界（アカデミズム）の範囲を大きく上回ることになりました。西欧の著作を翻訳するにしても、翻訳家であると同時に、学者であり組織者であり社会活動家であるという人びとが少なくありませんでした。また、ある学者は、翻訳を専門とするのでなく、系統的かつ広範に西欧の特定の学術理論を研究したのです。こうした「文化ブーム」「美学ブーム」、さらに「方法論ブーム」は、思想・文化を活性化

し、自由な論争を巻き起こし、一九八九年の前半には、きわめて大きな政治的エネルギーとなって噴出しました。

「六四事件」ののち、こうした活発な情勢、討論のエネルギーは中断し、思想・文化は急速に学術化（アカデミズム化）していきました。「老三届」世代の学者は、すでに、実力をそなえ創造性に富む学術界の中核となり、ひき続き発展する潜在力を誇示していました。例をあげるなら、梁治平、孫立平、鄧正来、鄭也夫、何光濾、劉曉楓、林毅夫、童世駿、張汝倫、蕭功秦、陳維綱、王輯思、張曉勁、陳来、王逸舟、徐友漁、王煒、陳平原、劉東、汪暉、王富仁、張頤揚などといった人びとです。これらの人びとだけが、中国の学術界でもっとも重要な人びとだというわけではなく、この名簿をもっと続けていくこともできますが、中国の学術界の中核がすでに、文革からそれ以後の世代の学者に移行したということは言えます。

――いろいろご紹介くださってありがとうございます。中国の思想・文化の変遷をたどるのに、よい手がかりができました。孫さんの意見では、中国の思想・文化は強烈な政治的情熱に導かれているということですが、それでは、いったいどういった明確な政治的主張があるのでしょう？　もしよければ、「六四事件」と、こうした思想・文化の変化の関係について教えてください。

孫　思想・文化界が厳密な意味で、明確な政治的主張を提出したことはありません。あるいは、政府の規制のせいで、学術界の政治的主張は真面目に検討されないことになっていると言ってもいい。総じて言えば政府は、社会形態や価値観などといったことがらを自由に討論することに、防衛的な態度をとっています。一九八三年十月、鄧小平は中国共産党第十二次二中全会で、「思想戦線は、精神汚染を被ってはならない」と、明確にのべました。精神汚染とは、二つの意味があります。ひとつは、西欧ブルジョワ階級の思想・文化を、受容し伝播すること。もうひとつは、共産主義や共産党や政府に対する不信感をふりまくこと。精神汚染を一掃したあと、こんどは、ブルジョワ階級の自由化に反対するキャンペーンが始まりました。この任務は、一九八六年九月の中国共産党第十二次六中全会の決議を受けて再度提出され、一九八七年の初めには全国で実施されました。精神汚染を一掃しブルジョワ階級の自由化に反対する任務は、胡耀邦と趙紫陽の二人が総書記をつとめていた期間、少しも成果が上がりませんでした。のちに当局の文書は、これが「六四事件」発生に至る重要な原因のひとつだとのべています。

私の考えですが、思想・文化上の観念を統一すると言っても、それはたかだか形式上のものにとどまり、実行的な統一など無理です。のちに江沢民がこうした問題についてのべたときも、政府と一致しないか、反対の見解をもっている人はただ、「服輸不服理」（敗北を認めるが理屈では負けない）のだと言いました。実際、当局が思想・文化の基準を統一するというやり方は、往々にして、あべこべの結果を招きます。すな

わち、当局ににらまれるものごとほど社会ではますます興味をもって討論されることになり、非難された当人も名が売れて得意になるのです。

「六四事件」は、政府も社会も、政治を制度化し操作するという点で、未熟であることを暴露しました。政府が不安定を恐れるいっぽう、社会は改革に高すぎる要求をしてしまうというのも、まさに現代化を進めつつある国家では、正常な状態です。観念の開放が、物質レヴェルの許容限度よりも大きいのです。

「六四事件」のころに、普遍的にみられた社会心理には、つぎの二つの内容がありました。第一に、政治的民主化の進み具合をもっと加速すべきだということ。第二に、権力経済（すなわち、いわゆる「官倒（クアンシオ）」、これは、権力や権勢を用いて経済的利益をむさぼることを指す）に反対すべきだということ。政府の見方によると、第一の心理状態「民主」は、西欧を基準にするもので、中国の政治形態には適合しません。また、第二の心理状態は、共産党自身による反腐敗要求と一致するところがあるものの、政権政党の合法性をまるごと否定してしまう危険がある。このため、衝突は避けられないことになりました。

政治の現代化の水準が高くないわけですから、「六四事件」の街頭抗議行動は、目的をもち組織をもって共産党と政府に反対する動きには、かぞえられないと私は思います。あれは中国の改革開放の時期に特有な、一種の政治性を帯びた美学の祝祭です。「美学ブーム」の理性主義的な探究は、街頭抗議行動のなかで情緒的なカタルシスを見出しました。形式的特徴からみるなら、あれはお祭り騒ぎです。よく似た情況は、一九六八年フランスの「五月革命」にもありました。「六四事件」が中国の思想・文化に直接与えた影響と言えば、自由な討論が中断してしまったことです。とかく騒ぎを起こすのが好きな学者や活動家は海外へ逃げ、大部分の真面目な学者は経験の総括を開始して、中国の現代化の実践のなかの、個別具体的な問題の実際的な研究に向かいました。

いまの学術界の関心は実務・秩序形成である

――それでは、九〇年代以降の中国の、思想・文化の学術水準は高まったのでしょうか？

孫　高まりました。いっそう成熟し、いっそう秩序づけられたと言ってもいいでしょう。ここでも当然、当局の政策が背景にあります。「六四事件」以後の思想の沈黙にともない、経済改革の速度もスローダウンしました。すでに掲出され討論の進んでいた、（国営企業の）公司化（民営化）や、市場経済体制などといったやり方が、このまま継続して進められていくのかどうか、はっきりしなくなりました。中国の改革とは、実際のところ政治改革なのです。現在にいたるまで、経済の状況は直接、政治改革の実効いかんに左右されている。総じて言えば、政治改革が滞っているあいだは、市場経済の成熟と高度成長を妨げます。一九九二年初め、すでに現役を

退いていた鄧小平は、「六四事件」のあとなすところなく停滞している状態に不満をのべ、みずから広東省沿海特区の都市を視察しました。鄧小平がえた結論は、二点あります。第一は、議論は要らない。第二は、もっとも有利な方法で経済を発展させよう。党中央は、この結論を文書にまとめ、実行に移しましたが、これがいわゆる「第二次改革高潮」（第二次改革ブーム）を形成します。

こうした背景が、思想・文化に対してよい影響を与えているのか悪い影響を与えているのかを、現在のところ言うのは難しい。一般民衆からみると、「文化ブーム」の条件はもうなくなり、生活のため一生懸命に金儲けすることにエネルギーをほぼ使い果たしてしまって、ほかの方面への関心は働かなくなってしまった。学術界においては、ほとんどすべての人びとが、自覚するにせよしないにせよ、過去の状況を総括し、実務と秩序形成にはげむことが、学問をするうえでの共通認識になっています。

ひとつ例をあげましょう。さきにのべた鄧正来は、民間活力に頼って二つの雑誌を出しました。すなわち、『中国社会科学季刊』と『中国書評』（隔月刊）です。三年来、この雑誌は両方とも、国内外で高い評価を受け、すでに中国思想・文化学術分野で一流水準の雑誌となっています。そのほかに、改革開放以来ずっと多くの読者をもっている準学術文化刊行物としては『読書』があり、依然として中国の思想・文化の現状を反映するメルクマールのひとつとなっています。『戦略与管理』『東方』『伝統与現代』などの新創刊の雑誌は、秩序形成の方式について、かなり高い水準の学術討論を展開しています。これらの雑誌を通して、日々成熟し、高い学術水準をもっている中国の中堅から若手世代の学者群がすでに出現していることを、明らかにみてとることができます。

学術的な関心からみるなら、問題は依然として、中国自らに有効な現代化のモデルは何なのかという論争に集中しています。けれども、イデオロギーのタブー領域が、なくなった

最新刊！
漢文名言辞典
鎌田　正・米山寅太郎　著
知りたい時にすぐ引ける、名言名句のよりどころ。
特色＝実際の生活に役立つ内容分類／やさしく、ていねいな解説／正確な出典／充実した索引／みやすい工夫
A5判・上製函入・924頁　定価6,592円

大評判！
世界ことわざ大事典
●ここには人間の知恵のすべてがある
柴田　武・谷川俊太郎・矢川澄子　編
思わずうなずく人生の真実、はっと目をひらかれる発見、笑いや風刺…世界108地域、9千余のことわざを収めた本邦初の大事典。
B5判・上製函入・1330頁　定価16,480円

大修館書店
〒101 東京・神田錦町3-24

わけではありません。三冊の本を、例にあげましょう。一九八八年、何博伝の『山坳上的中国』が出版されました。この本の副題は、「問題、困難、痛苦の選択」といい、公表された大量の統計数字や新聞報道を用いて、中国現代化の困難を示し、人びとに改革開放の危機意識をよびさましています。当時の「文化ブーム」のなかでこの本は広く読まれ、正式の発行部数は二〇万部に及びました。「六四事件」ののち、この本の正式な発行は中断されました。一九九四年三月には、ドイツ人の名前を借りて『第三只眼睛看中国』(第三の眼で見た中国)が発行されました。人びとはたちまち、この本には明らかな政治的背景があり、できれば一部の政治権力にとって替わろうとするある勢力の観点を代表していると見て取りました。学術界のこの書に対するおおかたの反応は、一顧だに値しないというものでしたが、それがかえって、思想・文化のなかの実務指向の動き、すなわち、論争を切り上げて実際的な作業に振り向けようとする要求を反映しているとも言えます。私の書いた『転型的中国』は、一九九四年九月の出版ですが、そのなかで、社会主義の学説と国家形態の真実の含意、改革開放後の社会主義の性質、中国現代化の前途といった問題、とりわけ「六四事件」の意義を正面から議論しています。学術界はすでにこの書物の評論を始めていますが、それについてはのべません。私が聞いた限りでは、この本は、「論争せず」の範囲外の重大な問題を正面から議論する、公然と出版された中国で初めての学術書だということです。

こうした状況からも、中国の思想・文化の変化をみることができるでしょう。

あといくつか、例をあげましょう。現在、学術界は、政府と社会との関係に関心をもっています。これは当然、政治体制に関連するわけですが、これは、政治的権利と経済的利益に照らして、政府と相互にチェックし、相互にタイアップできるような社会のメカニズムを要求しているのです。もうひとつの傾向は、いわゆる「漸進主義」の主張です。これは一九八九年以前に、学術界のある人が主張した「新権威主義」「新保守主義」のもうひとつの言い方です。この見方によると、強大な政府が社会の安定を維持するという状況のもと、上から下に、徐々に民主政治を実現していくという主張になります。この見方は、当局のイデオロギーとまったく矛盾しませんが、一九八九年以前と同じように、ブルジョワ階級の自由化として扱われています。いま「漸進主義」の改革観を語るのに、重要な参照点は、いわゆる「東西モデル」の成功の経験です。こうした経験に対して、当局は表だって反対を表明していません。

このほかの問題も、政策の変化にともなって合法的に討論できるようになりました。そんなわけで、一九八九年以前に市場経済を明確に主張することはできませんでしたが、現在では何の問題にもなりません。そこで学術討論も、もっと具体的な実践のあり方に転換していっています。たとえば、失業とインフレとでは、結局どちらを先に処理すべきか、これ

が目下、経済学界で論争となっている突出した問題です。

いまのべた問題はみな、理論的な性格の強い問題ですが、この点で「六四事件」以前と違うのは、討論それ自身の学術性です。当局の政策と必ずしも一致しない点があっても、厳格に学術的な観点を維持し、一般大衆の情緒に任せることをよしとしません。あと、学術界以外での思想・文化の状況ですが、私個人の感想は、娯楽性、刹那性が強まったということです。そこで、そういう現象はちょっとまともに語りにくい。それ自体をひとつの問題として議論するなら別ですが。

——最後に孫津さんの日本に対する見方をうかがいたいのですが。

孫　日本のことはあまりよくわかりませんし、中国人が日本をどうみるか、正確に語るのはむずかしいですね。

全体的な印象としては、日本人は口数が少ないが、やることはやる。中国人とちょうど反対です。二十世紀になってから、中国の現代化は民族の危機感の表われでした。中国国歌に「中華民族はいま、もっとも危険な時期にさしかかった」と唱われた当時から、改革開放の時期に「落伍したら打たれる」「機会を逃がすな」などと言ったことまで、みなそうです。けれども実際には、どんな危機感があったのか、それはわからない。「五四運動」以来、思想・文化のもっとも突出している面は批判です。中国を批判するのみならず、西欧をも批判します。日本はこの反対で、伝統的な中国文化を批判せず、現代の西欧文明も批判せず、誰の批判もみな受けとめ、誰の方法もみな採用して、国家を富強にさせました。私は日本人の危機感こそ本物だ、国民の危機だと思います。なぜなら、日本はとても土地が狭いから。中国人の危機感はまことに捉えにくい。それも一種の民族危機ですが、今日にいたってやっと、中国は土地が広いけれども、資源の利用の点ではとても貧困だということを、中国人が承認したありさまです。というわけで、空間感覚から言うと、中国人はとても危機感を感じにくいです。

西欧の人びとは日本が「三無社会」だと言います。空間も、余暇も、プライバシーもない(no space, no leisure, no privacy)。これは違うと思います。日本人は決して、一団に固まって、いつもせわしなくしている仕事中毒ではありません。なにごとにも最善をつくし、どこでも細かいことをおろそかにしない、すべて規則通りにやるのが日本人です。ここに、日本国民のもっとも深い危機感が表われていると思う。なにかをいい加減にやれば自分を誤るという危機感です。これを私個人は、経済と実利を求める、とてもよい文化だと思っています。中国の思想・文化界の人びともおおむね、すでにこの点、すなわち、学術上の実務・秩序形成の重要性を認識しています。すなわち以前の空理空論と浪費を避けねばならず、思想・文化の建設に励まなければならないということです。